2018.8.19　年間第２０主日

わたしは命のパンである

ヨハネによる福音　6:51-58

（そのとき、イエスはユダヤ人に言われた。）「わたしは、天から降って来た生きたパンである。このパンを食べるならば、その人は永遠に生きる。わたしが与えるパンとは、世を生かすためのわたしの肉のことである。」

　それで、ユダヤ人たちは、「どうしてこの人は自分の肉を我々に食べさせることができるのか」と、互いに激しく議論し始めた。イエスは言われた。「はっきり言っておく。人の子の肉を食べ、その血を飲まなければ、あなたたちの内に命はない。わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は、永遠の命を得、わたしはその人を終わりの日に復活させる。わたしの肉はまことの食べ物、わたしの血はまことの飲み物だからである。わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は、いつもわたしの内におり、わたしもまたいつもその人の内にいる。生きておられる父がわたしをお遣わしになり、またわたしが父によって生きるように、わたしを食べる者もわたしによって生きる。これは天から降って来たパンである。先祖が食べたのに死んでしまったようなものとは違う。このパンを食べる者は永遠に生きる。」

説教

先週、先々週に引き続きヨハネ６章からみことばを聞きます。

松尾芭蕉が提唱した俳句の技法に「さび」「しをり」「ほそみ」「かろみ」があります。ヨハネ６章をこの中の「かろみ」を用いて理解するとどうなるでしょう。

パンの奇跡について共感福音書はあっさりと事実だけを記録している一方でヨハネ福音書は６章全部をつかってこの奇跡について記録しています。これは「かろみ」からするとかなり「重い」となります。ヨハネが独自にイエスのことばを編集してまとめて６章に記録したというのが一般的な解釈です。

どうしてという疑問についてはヨハネ福音書は４つある福音書の中でいちばん最後に書かれた、イエス昇天後 70 年ぐらい（西暦 100 年ごろ）からだと説明されます。今年は戦後 73 年目にあたります。イエス昇天を敗戦にたとえてみれば、ちょうどヨハネ福音書が書かれたころが、敗戦から 73 年たった今となります。現代では直接戦争体験がない人がほとんどです。ヨハネ福音が書かれた当時のイスラエルもイエスを直接知らない人たちがほとんどだったことでしょう。それゆえに、くどいぐらいにパンの奇跡に言及したという説明されています。

イエスの福音を「かろみ」から見るといったのは「むずかしいことをやさしく、やさしいことをふかく、ふかいことをゆかいに、ゆかいなことをまじめに」（注 1）こんな見方でイエスを解釈しようということです。この見方からするとヨハネ 6 章は重すぎです。

じつはパンの奇跡に関してはつっこみどころはたくさんあります。パンを買うお金があるのないのと議論したり、そもそも辺鄙なところにパン屋があるのか、あっても 5000 人分の在庫があるわけないだろとか、子どもの弁当をとりあげたら泣くだろうとかとか。2000 年前の現場のイエスや弟子たちはゆかいにそして真面目にやっていたのではないでしょうか。

きょうの福音個所では「パンとワイン」「肉と血」が語られます。イエスとユダヤ人とのやりとりもこっけいなところもありますが、福音全体のイメージとしては重めに感じます。でも、今現在の聖餐のありようが「かろみ」のイエスの面目躍如といえるかもしれません。カトリックではパンはホスチア（ウエハース）だし、オーソドックス（東方教会）ではプロスフォラ（ふつうのパン）でアングリカン（聖公会）だけがパン（ホスチア）とワインを陪餐できる。プロテスタントはパンの種類は様々（食パンを小さく切ったものだったりホスチアだったり）ワインはださずにブドウジュースになっている。

「ゆかいなことをまじめに」やりすぎて混乱状態？イエスの思惑通りになっています。

せかんどチャーチの聖餐はパンとワイン、聖公会と同じ方式です。専門用語では二種陪餐といいます。一度だけ東方教会の礼拝にでたことがありそこで供されるプロスフォアが大きく（市販のメロンパンぐらい）てびっくりしました。その教会だけかもしれないのですが、パンは持ち帰りでみなさん必要なだけ？持ち帰っていました。両手にかかえて持ち帰る人もみかけました。わたしもそんな豪快な聖餐式をやってみたいとあこがれています。

注１「むずかしいことをやさしく、やさしいことをふかく、ふかいことをゆかいに、ゆかいなことをまじめに」井上ひさしが座右の銘にしていたことばといわれています。